
歌えぬ小鳥のオラトリオ

蒼月 かなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌えぬ小鳥のオラトリオ

【Nコード】

N6571U

【作者名】

蒼月 かなた

【あらすじ】

『出来そこないの朱火^{しゆか}』は歌士の人、森の人と呼ばれる森歌^{しんか}の民の中で歌を歌えぬ12の子供。そんなある時、朱火は森の中で森羅と言う男に出会う……………。

朱火^{しゅか}は今日も一人森を走った。抜け出したのは祈祷歌の授業。歌士の人、森の人と呼ばれる森歌^{しんか}の民にとって歌は人や物の魂の響きに乘せて歌うもの。しかし、今年12才になる朱火は未だに己の歌すら歌えない出来そこないだった。今日も隣の席の男子にからかわれ相手を殴って逃げてきたのだ。

森歌の民の歌は人の子の歌とは違い、雨を呼び、森を育て産まれた子を祝福し、死にゆく人の道標となる。とても重要な歌を歌わねばならない。幼い子供でも自分の歌は歌えるのに朱火にはどうしてもそれができなかつた。「やーい出来そこない！やっぱりお前、貰われっ子じゃねーの？」そう言った男子の顔が頭に浮かんで朱火は唇を噛み締めて涙をこらえた。父と母は優しい。でも兄妹達の中で歌えないのは自分だけだ。2歳の莉夏^{りっか}だってたどたどしく歌う。もしかしたら本当に自分は両親の子じゃないのかも知れない。こみ上げた涙が止まらなくポロポロと流れ落ちて来た時だった。

遠く　　低く　　響く　　コエ。

歌だ　　この感じは鎮魂歌。

古語で歌われているため年若い朱火には意味が分からない。けど。胸に響く歌だった。哀しみの混ざった魂を震わせる歌。朱火は思わず走り出していた。声の主を求めて。そこにはいたのは無精ひげを生やした男。大きなコクリコの大木に手をあて祈るように歌っている。

朱火はその姿に見入りそして再び涙して蹲った。どれほどそうしていただろう。ふと射した影に朱火は真っ赤になった目をあげた。そこにいるのは先程の男だ。まるでこの森の深緑を映したような髪に

鋭い黄金色の瞳。その瞳が申し訳なさそうにこちらを見つめている。

「すまんなお譲ちゃん。てっきり人がいないと思って……………歌に当てちまつたみたいだな。立てるか？」

その言葉にうつんと首を振る。強い力を持つものが歌を歌うとまれに当てられる事がある。朱火はまさにその状態だった。男は朱火を抱えあげると木の根に出来た窪みに座らせた。水筒を取り出して朱火に飲ませる。

「アリガト」

「いやいいんだ。済まなかった。しかしこんな時間にどうしてこんな所にいたんだ？今は学校で授業中のハズだろ？」

その言葉に朱火はさっきの事思い出してまたボロボロと泣き始める。

「お、おいどうした?!」

慌てた男がどうしていいのか分からずオロオロする様子がおかしくて思わず朱火は笑ってしまった。

男は森羅しんらと名乗った。朱火の朱金の髪を撫でながら根気よく話を聞いてくれる。

「朱火は間違いなく森歌の民だ。でなければ俺の歌にあれ程同調できるはずがない」

「じゃあなんであたしだけ歌えないのかなあ……………」

ぷくりと盛り上がってきた涙を拭いてあげつつ森羅が朱火の鈍色の

瞳を覗き込む。ドギマギする朱火をよそに森羅は朱火にこう告げた。

「魂の奥に傷が見える……………あまりに奥過ぎて誰も気付かなかつたんだ……………」

「傷？」

「ああ、魂に傷があると上手く歌えないんだ。大丈夫。その傷さえ治せれば朱火も歌えるようになる」

「ホント?!」

「嘘は言わないさ。そうだな、これから時々ここに来い。放課後、学校が終わってからだ。俺が歌で癒してやるう。ただ焦りは禁物だ。お前の傷は深い所にあるからな」

「うん。うん！有難う！！森羅大好き！！！」

そう言つて朱火は森羅に抱きついた。

こうして森羅は放課後の森で朱火の魂を癒す歌を歌つた。朱火は前よりちゃんと授業に出るようになり同級生達の心ない言葉も我慢した。それから半年余りの月日が流れ……………学校で恒例行事の奏歌祭そうかさいが開かれる事になった。族長達に日頃の鍛錬の成果を見て貰うのだ。実力のある子供は選抜され、上の学位に上がる事ができる。今後の人生が一般の森歌の民として終わるか、各地を巡る歌士の人、森の人となれるかはこれにかかっているといつていい。

「ねえ森羅、私歌えるかなあ……………？」

「傷はもう治つた。後は朱火が勇気を出して魂の扉を開けるかどうかどう

「かだ」

そう言っつていつものように朱火の頭を撫でてやる。まだ、一度も歌った事のない小鳥は怯えて魂の扉を開けるまでに至つてなかつた。

「朱火。俺も昔は魂に傷持つ子供だつた。自分が何故歌えぬか分からなくてなあ……………俺は喧嘩ばかりしていた。そんな俺を癒してくれたのが俺の師匠の歌流様だ。御高齢ながら素晴らしい技量の持ち主で、歌う事とは魂に沿う事だと教えてくれた。無理矢歌うのではない、魂が語りかけてくる事を受け止めて歌うのだと。朱火にもきつとそれが出来る。自分の魂の声を聞いてあげてごらん？」

「魂の声を聞く……………森羅のお師匠様は素敵な人ね。今は何処にいるの？」

そう言つと森羅はコクリコの大木を見上げて笑つた。

「……」

朱火は森羅がここで鎮魂歌を歌つていた意味を理解した。

「じゃあ、あたし森羅のお師匠様にありがとつて言わなきゃ。ここで森羅に会えなければ私は何時までも『出来そこないの朱火』だつたもの」

そう言つて朱火が大木に抱きつくと森羅の優しい手が朱火の髪を撫でる。

「あのね、森羅……………奏歌祭に来てくれる？」

「ああ、かならず行こう。朱火が歌う所を楽しみにしているよ」

奏歌祭の当日、朱火は緊張した面持ちで順番を待った。この日は祭りだけあって多くの村人がここにきて歌を聴きにきている。同級生の男子に「お前歌えない癖に」と言われながらも朱火は自分の番が来るのを待つ。その合間に朱火は観客席を探した。両親と兄妹の心配そうな顔はすぐに見つけた。しかし深緑の髪

に黄金の瞳の男の姿は見えない。忘れてしまったのだろうか……？朱火の心に不安が芽生える。森羅が来てくれると言ったから頑張ろうと思ったのに。遂に順番が回って来て朱火は緊張したまま族長達の座る連座の前に立った。そこでしばし凍りつく。目の前には深緑。黄金の瞳。まさに族長が座る席に森羅が座っていたのだ。

「どっした。歌を」

やはり無理だったかというように教師が連座の前に来ようとした瞬間、森羅が片手でそれを止める。

「歌ってらん」

優しく響く森羅のコエ。あの時森で歌ってくれた声と一緒にだ。朱火は目をつぶり深呼吸すると自分の魂に語りかけた。

あなたのコエを聴かせて

あふれ出たのは音。

金の銀の色鮮やかな朱の。歌声は澄んで遠くに響く。

その声に誰もが言葉を失った。遠い記憶。幸福な気持ちを喚起させる歌。誰もがただ少女の歌に心添わせる。

そして初めて歌を歌った少女はこの日異例の速さで歌手の人、森の
人として森歌の民に認められたのだった。

(後書き)

朱火はこの後大陸に名を馳せる歌い手に。
良く森羅といるのが見かけられたそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6571u/>

歌えぬ小鳥のオラトリオ

2011年7月11日12時12分発行